

片付けたいのに

セルフネグレクトからの脱出

外で気を張り 家に帰ると「電池切れ」

ごみ屋敷 誰もがなり得る

だった。

片付けオンラインは、代表の長島拓也さん(33)が松本市笹賀Ⅱが2019年4月に設立。元々、不用品回収やリサイクル事業をしていたが、遺品整理や物であふれかえってしまった住宅の片付けをどこに頼めばいいかわからず困っている人が多い、と知った。現在は、県内外から年間千件を超す依頼があるという。

「ごみ屋敷になる可能性は

誰にでもある」。長島さんは実感を含める。いつか何かに使えるだろう、と使わない物を手放せない高齢者、育児疲れで心を病み、使用済みおむつすら片付けられなくなった親など、さまざまな事情がある人に対応してきた。1人暮らしの若者やシングルマザーは、地域とのつながりが希薄なケースも多いという。

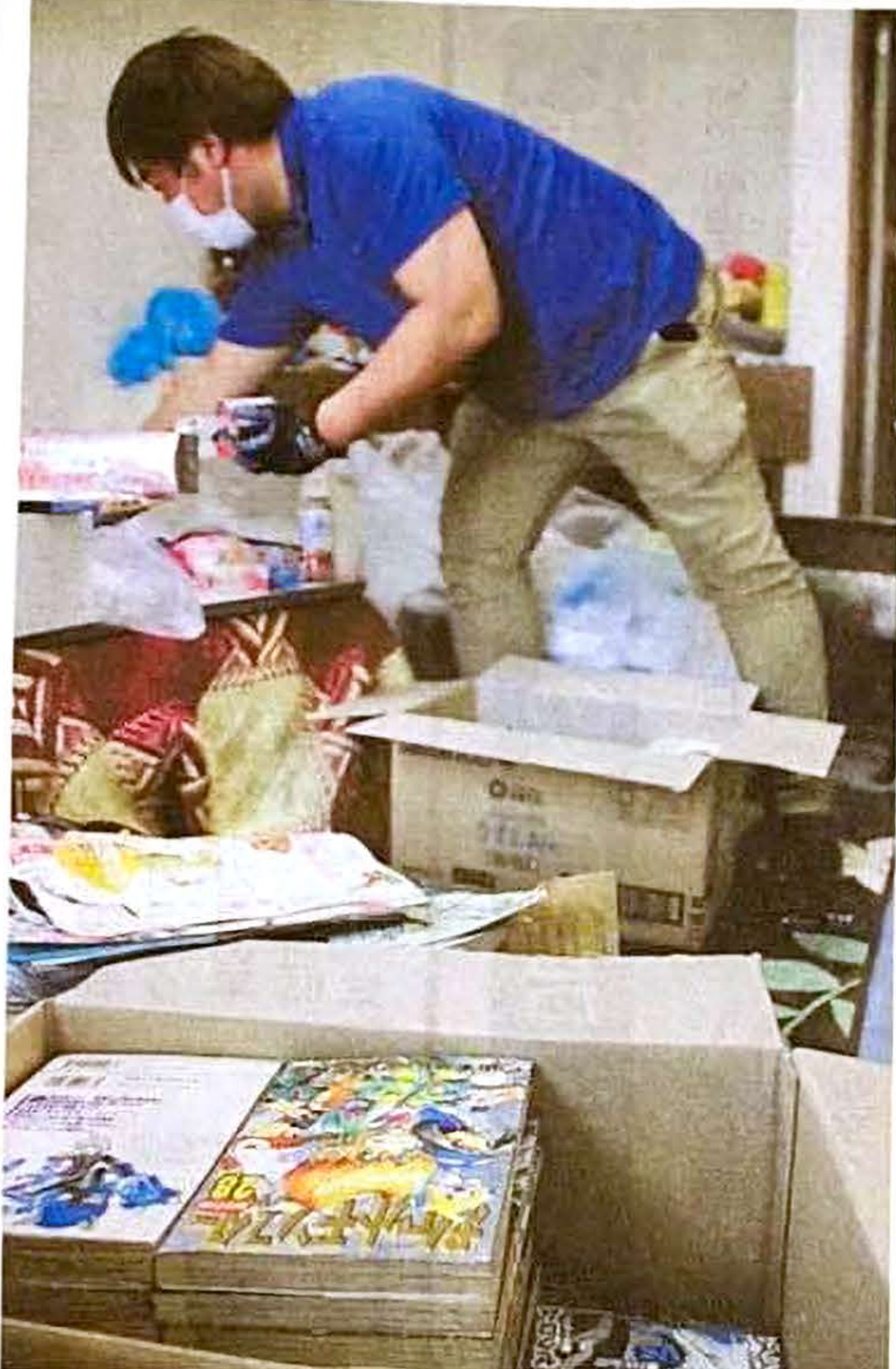
「人を呼べる状態にないから、どんどん相談しにくくなって、孤立して悪化してしまっている面もある」と長島さん。忙しい、後でまとめてやろうとが積み重なったと説明する人が多いが、「素人目に見て、心の調子を崩しているように見える人も多い」。

依頼者には、教員や公務員、福祉関係者などが目立つという。「外では常に気を張っていて時間も追われ、家に帰ったら「電池切れ」になっちゃうのかな」と推し量る。

「他人の家で物を片付けるのは本当に難しい」。スタッフの小松拓史さん(29)がつぶやいた。「依頼者に寄り添って作業しないと必要な物を捨てたり、大事な物を乱雑に扱ったりしてしまいかねない」。ティッシュの空き箱一つにも、何か思いが宿っているかもしれない、と考える。

作業開始から約4時間。「きれい」。タエコさんは思わず声を上げた。小松さんは「せっかくだから模様替えしますか」と笑い掛けた。

「アニメで最強のキャラって誰だと思いますか」「俺、ドラえもんだと思う」
1月7日、東信地方の木造アパート。大量のごみで埋まった部屋に、笑い声が響いた。1人で暮らすタエコさん(仮称)が、片付けや遺品整理を手掛ける松本市の業者「片付けオンライン」のスタッフの冗談に肩を震わせた。この部屋で誰かと話すのは数年ぶり



タエコさんに確認しながら必要な物を分けていく小松さん。大切な漫画はきれいな段ボールに入れた＝1月、東信地方

片付け業者と業者を巡るトラブル 国民生活センター(東京)によると、業者による「ごみ屋敷」の片付けや遺品整理、不用品回収などを巡り「作業後に見積額より高額な料金を請求された」「作業内容が当初の説明と違った」といった相談が全国各地で寄せられている。県くらし安全・消費生活課によると、県内でも「見積もりだけ頼んだのに回収していった」などの相談があった。同センターは、複数業者に現場確認の上で見積書を出してもらおうなど慎重な対応を呼び掛けている。松本市の「片付けオンライン」は、掃除の仕方や不用品の処分、遺品整理などに関する無料相談を受け付けている(0120・315・515)。